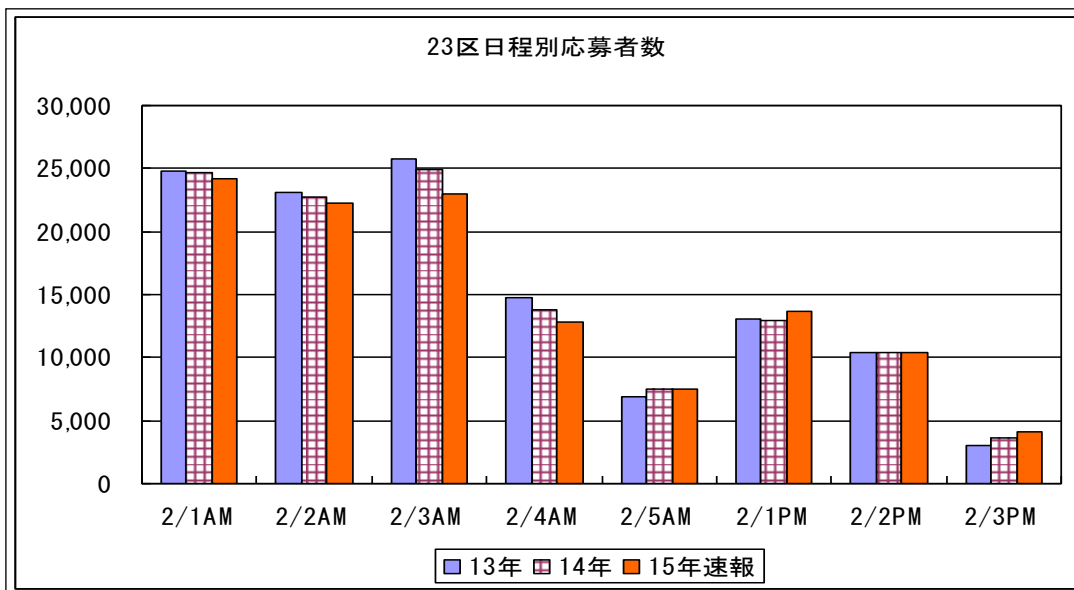


1 都3県中学入試概況 (速報版)

[1 都3県中学入試概況]

2月18日現在の小社アンケートの集計から、お伝えします。

1. 東京23区



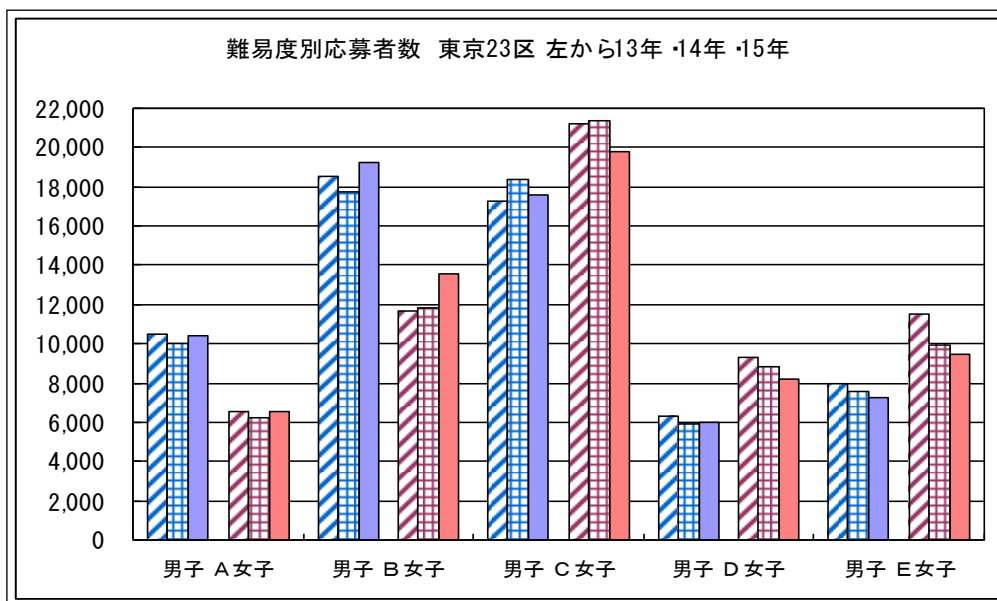
東京23区の公立小6年生徒数は約58,400名で、昨年より約800名減っています。東京23区内中の中学受験の応募総数は、私立、国立、公立一貫校の合計で、2月18日現在、1月までの帰国入試を含めて約125,000件です。昨年の最終は約125,800件でした。入試結果未公表の学校や、3月に二次募集を行う学校もあり、最終的にはこれらの応募者数が上乘せされますが、大幅に増えることはないでしょう。昨年とほぼ同じ応募総数になりそうです。昨年は減少していましたから、全体的には中学受験志向が弱まっているものの、東京23区内については下げ止まったようです。

上のグラフは東京23区内の2月1日以降の今年の中学受験の応募者数を日程別に合計し、一昨年、昨年と比較したものです。私立、国立、公立一貫校の合計ですが、都内で実施される地方寮制校の入試は含んでいません。グラフのように昨年よりも応募者数が増えているのは2月1日午後と3日午後で、速報値ではそれぞれ700件以上、400件以上増加しています。また、5日午前と2日午後も昨年並みですが、中心となる2月1日～4日午前入試はすべてマイナスです。こうした状況なのに、最終的には昨年並みの水準に達しそうだ、というのは、グラフに出ていない1月までの帰国生入試の応募者が増えているからです。帰国生入試の新設が盛んで、1つ1つの学校で見ると小規模な入試ですが、まとまるとそれなりの数になります。ただ、実際に海外からの帰国生の人数が増えているかというところでもありません。私立中学校が海外で合同説明会を開くケースは増えていますが、1人の受験生が何校も帰国生入試を受験するようになっているのが実態です。

さて、今年はサンデーショックの年です。有名な話ですから細かいことは割愛しますが、女子学院が日曜日の入試を避けて例年は2月1日午前入試を2日午前に移しました。立教女学院や東洋英和も

同様です。中堅前後の学校でも恵泉女学院は1日の午後に、玉川聖学院は2日に入試を移しました。しかし、1日午前の応募者減少数はこれら1日午前の入試を避けたプロテスタント校の減少分ほどは減っていません。1つには、桜蔭や鷗友学園など、1日午前の入試を避けたプロテスタント校と併願する受験生で応募者が増加した女子校が難関・上位校に多いこと、もう1つは1日午前の難関・上位の男子校に小幅ですが応募者を増やしている学校が多いこと、共学化で人気が発火した中堅までの学校が3校あることです。このため、1日午前はあまり減りませんでした。

しかし、2月2日午前はやや減っています。1日午前から移ってきた学校があり、さらに昨年2月3日に入試を移した青山学院が2日に戻ってきたのに応募者は減っています。神奈川県の場合のグラフと比べると違いがわかります。サンデーショックの影響は難関・上位校の一部に限られ、中堅前後の学校では大勢に影響していません。東京23区と神奈川県の入試規模の違いから、このような状況になっています。3日も減少していますが、公立一貫校の応募者の減少が影響しています。一昨年の3日午前は1日午前よりも多い応募者数でしたが、昨年は1日午前とほぼ同じ、今年は1日午前を下回っています。公立一貫校の難度と高倍率が受験生に浸透するにつれ、敬遠ムードが起きたようです。4日午前の減少は、全体的な中学受験早期終了傾向の影響です。1日午後や3日午後の増加は恵泉女学院の移動と、上記の共学化3校の応募者の増加が中心です。



今度は、難易度による志望校選択の傾向を見えます。グラフは各校の応募者数を難易度別に上からA～Eの5段階にグルーピングして合計し、一昨年、昨年と比べたものです。グルーピングは各年の入試直前の予想難易度をもとにしていて、毎年の受験生がどの難易度の学校をどれだけ希望しているかを表しています。公立一貫校は受験生の学力分布が幅広いため外しています。また、男女別でグラフにしていて、男女校の応募者はそれぞれ男子・女子に含めています。男女別の内訳が未公表の学校は外しました。グルーピングは次の通りです。

- A…麻布・海城・開成・駒場東邦・武蔵・早稲田・早大学院・筑波大駒場・桜蔭・女子学院・豊島岡女子・雙葉・慶應義塾中等部・渋谷教育学園渋谷・筑波大附属
- B…学習院・暁星・攻玉社・芝・城北・巣鴨・世田谷学園・東京都市大付属(I類)・本郷・明大中野・立教池袋・鷗友学園・大妻・学習院女子・共立女子・光塩女子・頌栄女子・白百合学園・東洋英和・普連土学園
- ・立教女学院・青山学院・国学院久我山(S T)・淑徳(東大)・東京都市大等々力(S特選)・東京農大第一

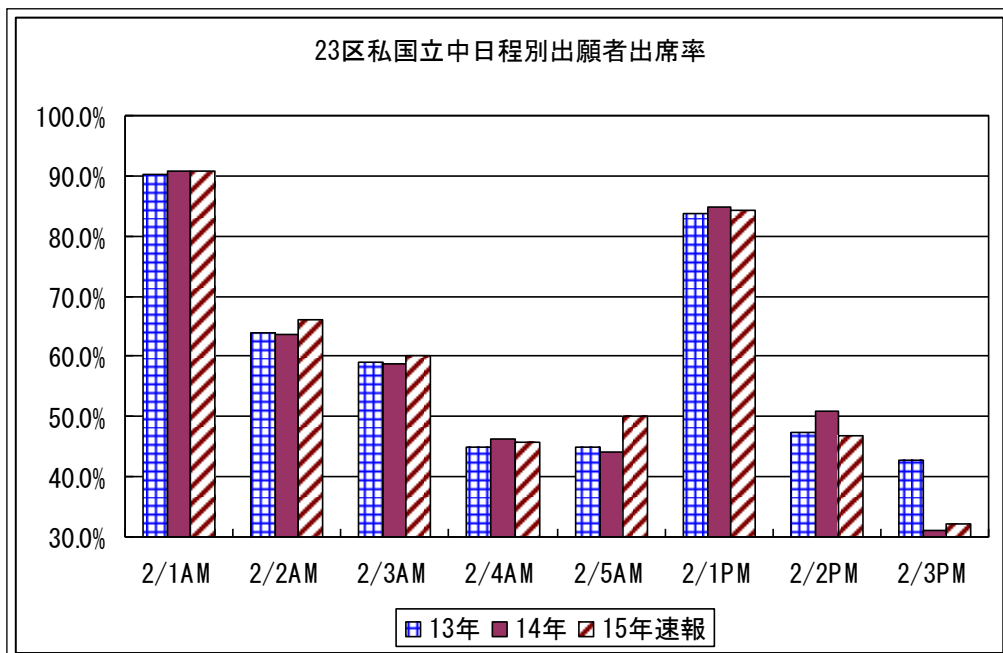
- ・ 広尾学園(医歯サイエンス)・お茶の水女子大・東京学芸大世田谷・東京学芸大竹早・東京学芸大国際
- C… 足立学園(特奨)・佼成学園(特奨)・芝浦工業大・成城・高輪・東京都市大付属(Ⅱ類)・獨協・跡見学園
- ・ 江戸川女子・大妻中野・恵泉女学園・香蘭女学校・実践女子学園・品川女子学院・十文字(スーパー)
- ・ 田園調布学園・東京女学館・中村(特待)・富士見・三輪田学園・山脇学園・かえつ有明(特待)
- ・ 国学院大久我山(一般)・淑徳(スーパー)・順天・成城学園・青稜・東大附属・東京都市大等々力(特選・特進)
- ・ 日大第二・広尾学園(本科)・宝仙学園理数インター・安田学園(先進特待)
- D… 足立学園(一般)・京華(特選)・佼成学園(一般)・聖学院(特待選抜)・日大豊山・佼成学園女子(特奨)
- ・ 十文字(一般)・昭和女子大昭和・女子聖学院・女子美術大付・トキワ松学園(特待)・東京家政大附属(躍進)
- ・ 中村(一般)・日大豊山女子・文化学園大杉並(難進)・目黒星美・八雲学園・郁文館(特奨・特選)
- ・ 開智日本橋(特待・最先端)・かえつ有明(一般)・駒込・淑徳巣鴨(スカラシップ)・城西大附属城西(GA)
- ・ 多摩大目黒(特待特進)・東海大高輪台・東京成徳大・東洋大京北・日大第一・文教大付属・三田国際(インター)
- ・ 目白研心(特進)・立正大立正(特待)
- E… 京華(一般)・聖学院(一般)・日本学園・愛国・小野学園・川村・神田女学園・北豊島・国本女子・京華女子
- ・ 麹町学園女子・佼成学園女子(一般)・淑徳SC・成女学園・聖ドミニコ学園・星美学園・玉川聖学院
- ・ 瀧野川女子学園・千代田女学園・三田国際(本科)・東京家政学院・東京家政大附属・東京女子学院
- ・ 東京女子学園・トキワ松学園(一般)・富士見丘・文化学園大杉並(一般)・文京学院大女子・村田女子
- ・ 和洋九段女子・郁文館(一般)・上野学園・開智日本橋(先進・総合)・共栄学園・国士館・桜丘・実践学園・修徳
- ・ 淑徳巣鴨(特進・進学)・松蔭・城西大附属城西(普通)・杉並学院・駿台学園・清明学園・成立学園
- ・ 多摩大目黒(進学)・帝京・貞静学園・東京立正・東邦音大東邦・新渡戸文化・日本工業大駒場・日出・武蔵野
- ・ 目黒学院・目白研心(選抜)・安田学園(一般)・立正大立正(一般)

全体的な傾向では、男子は上位校のBグループと中堅校のCグループが肩を並べていて、難関校のAグループはそれより少なく、やや入り易い学校のDグループはさらに少ない応募者数ですが、入り易い学校のEグループはDグループより多い応募者数です。女子はCグループが最多で、次がBグループ、その次は入り易いEグループ、それよりやや少ないのがDグループで、最少は難関校のAグループです。千葉県や埼玉県とはグラフの形が全く違います。各都県の中学受験生の考え方の違いが現れています。

今年の男子は、AグループとBグループが増加しました。昨年とは逆の動きです。Cグループは減少していますが、こちらも増減で見れば昨年とは逆で、隔年現象です。Aグループの増加はあまり大きくはありませんが、今年は難関校・上位校志向が高くなっていると言えます。Dグループは昨年並み、Eグループはやや減少しました。女子もA・Bグループが増加しています。こちらはサンデーショックの影響でしょう。Aグループの増加があまり大きくないのは、女子学院に関係する動きで増えた分が中心だからで、前述のように、東京23区の受験規模の中ではあまり大きな差にならないことと、2日に動いた女子学院の併願先として、桜蔭や雙葉を選ぶような「難関校連続受験」が以前のサンデーショック時よりも減っているからでしょう。その分鳴友学園など、Bグループの学校を選ぶ動きは強まっていて、それがBグループの増加につながっています。安全志向で確実性を狙うのが受験生の主流でした。

C・D・Eグループはいずれも応募者数が減っています。今年は女子の中学受験志向が弱くなっている影響でしょう。Eグループは昨年減少し、今年も小幅にはなりましたが、減少が続いています。まだまだ応募者の絶対数はA・Dグループより多いのですが、減少傾向が続いています。東京23区はEグループの学校に対して独特の人気がある地域です。「まだ学力的・学習姿勢面で十分な力はないが、中

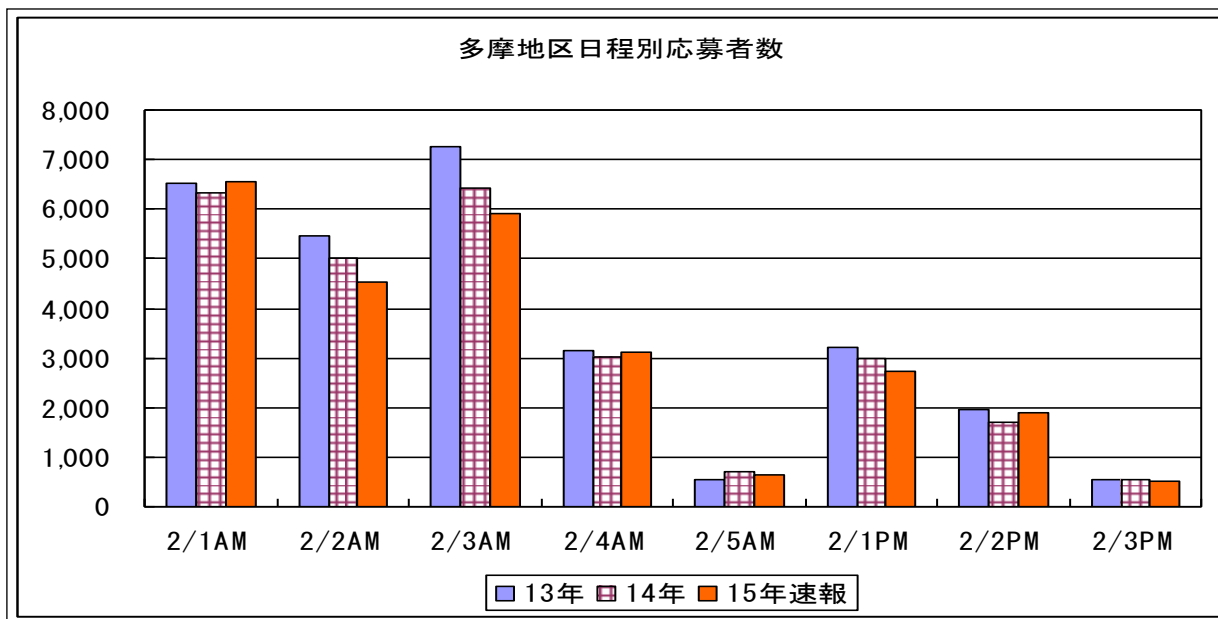
高6年間でしっかり育てるために中堅までの学校を選択する」というニーズです。成長途上の、指導に手のかかる生徒に対して、公立中学にはできない面倒見のよさを求める志向です。しかし、こうした学校に対するニーズは、公立中学校の指導が改善されてくるにつれて減ってきているのが現状です。なお、特にEグループの女子校は、多くの学校で応募者が少なく、ほとんど不合格が発生していませんが、これはEグループ校へのニーズに対して学校の募集枠が多すぎるためです。



次に各日程の出席率(受験率)を見てみます。上のグラフです。公立一貫校は出席率が極めて高いので外しています。2月1日午前・午後の出席率が高く、他の日程は大きく下がるのは例年と同じで、1日午前でも90%ですから、千葉県や埼玉県のグラフよりも低くなっています。欠席のほとんどがダブル出願(同じ日程・時間帯の複数の学校に出願しておいて、受験生本人の直前の可否状況や健康、入試に対しての自信などで受験校を決定)です。今年は2日午前、3日午前、5日午前出席率が上がっていますが、2日午前はサンデーショックの影響でしょう。3日午前は学習院女子や東洋英和などのサンデーショック関係だけでなく、成城、早稲田、慶應中等部の受験者の増加が理由です。5日午前は獨協、立教池袋、八雲学園の増加が理由で、一部の学校は遅い日程まで挑戦する受験生が増えていますが、それでも出席率50%ですから半分は欠席しています。2日午後は下がっていて、入試早期終了傾向が見受けられます。3日午後は昨年が続いてごく低水準でした。

2. 多摩地区

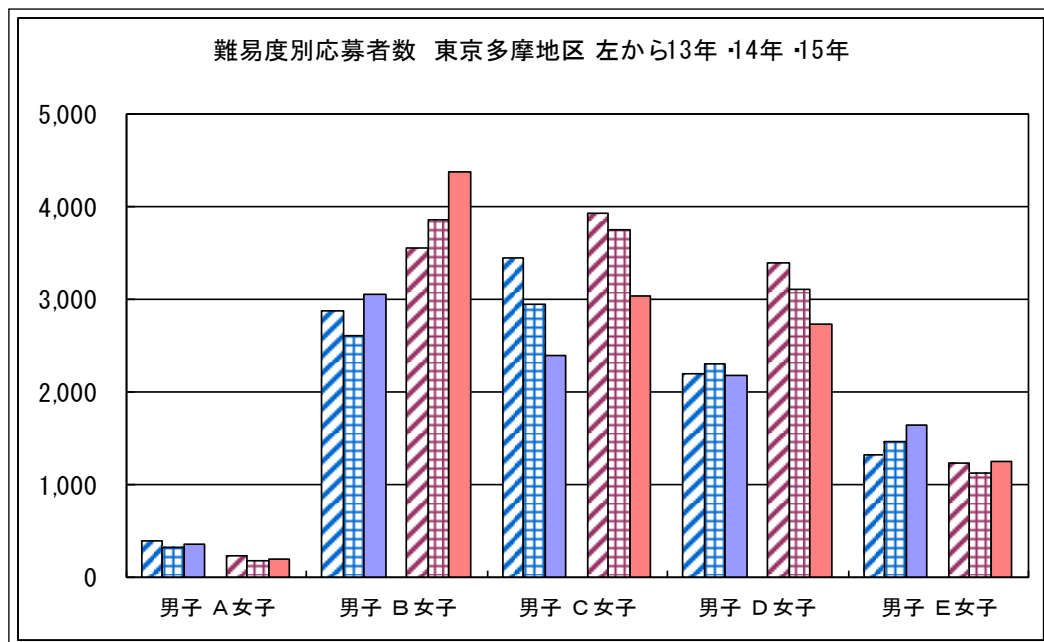
今年の多摩地区の公立小6年生徒数は約34,700名で昨年より約200名増加しています。首都圏では生徒数が減っている地域が多いので、1%に満たない増加ですが、珍しいことです。1月までに実施される帰国入試を含めた、2月18日現在の中学受験の応募総数は私立、国立、公立一貫校の合計で約26,400件となっていて、昨年最終より3%弱の減少です。一部に入試結果未公表の学校や、追加入試などもありますが、いずれも小規模で昨年の水準には届かずに終了しそうです。応募総数は昨年も減少していて、23区よりも中学受験志向が弱くなっています。次ページのグラフは中学受験の各校の応募者数を日程別に集計して一昨年、昨年と比較したものです。私立、国立、公立一貫校の合計です。



全体的な傾向では、今年は2月1日午前の応募者数が最多、次が3日の午前で、2日午前はそれより少なく、4日の午前と1日午後、2日午後はさらに少ない応募者数で、5日午前と3日午後は小規模な入試です。グラフで分かるように一昨年は3日午前が最多で1日午前よりも多い応募者数でしたが、減少が続いて、昨年は1日午前とほぼ同じ、今年は1日午前よりも減っています。原因の1つは、3日の公立一貫校の応募者が減っていることです。開校後数年たって、その難度や倍率の高さが浸透してきたために、敬遠ムードが起きています。減っているのは公立一貫校だけでなく私立も減っています。3日は有名大学の附属校や著名な進学校で入試を行っている学校が何校もありますが、応募者が減っている学校が目立ちます。

2月1日午前、4日午前、2日午後は若干ですが応募者が増えているものの、3日午前だけでなく2日午前や1日午後の応募者の減少がそれなりの減少幅で続いていることは、1つには多摩地区全体で中学受験志向が弱くなっているためですが、23区など、隣接地区から多摩地区の学校を受験しようとする受験生が減っていることも指摘されます。受験生の都心志向です。「郊外の良い環境でのびのびと」を看板にした学校は何校もありますが、受験生は電車が混んでいても都心部の学校を選ぶ傾向が強くなっています。このあたりは住宅の選択と同じです。それでも著名な大学の附属校や、大学進学実績で定評がある学校は少々応募者が減っても、むしろ受験生が絞られて合格最低点がかえって上がるケースが見られますが、中堅校はなかなか人気が上がらない状況になっています。

次に難易度別の志望校選択の状況を見てみます。次のページのグラフは各校の応募者数を、難易度別にA～Eの5段階にグルーピングして合計し、一昨年、昨年と比べたものです。グルーピングは各年の入試直前の予想難易度をもとにしています。公立一貫校は受験生の学力分布の幅が広いため、集計から外しました。また、男女別のグラフで、男女校の応募者はそれぞれ男子・女子に含めていますが、男女別の内訳が未公表の学校は外しています。グルーピングはグラフの下です。



A…早稲田実業

B…桐朋・吉祥女子・晃華学園・穎明館・成蹊・中大附属・帝京大学・法政大学・明大明治・東京学芸大小金井

C…大妻多摩・桜美林・創価・東京電機大・明治学院・明大中野八王子

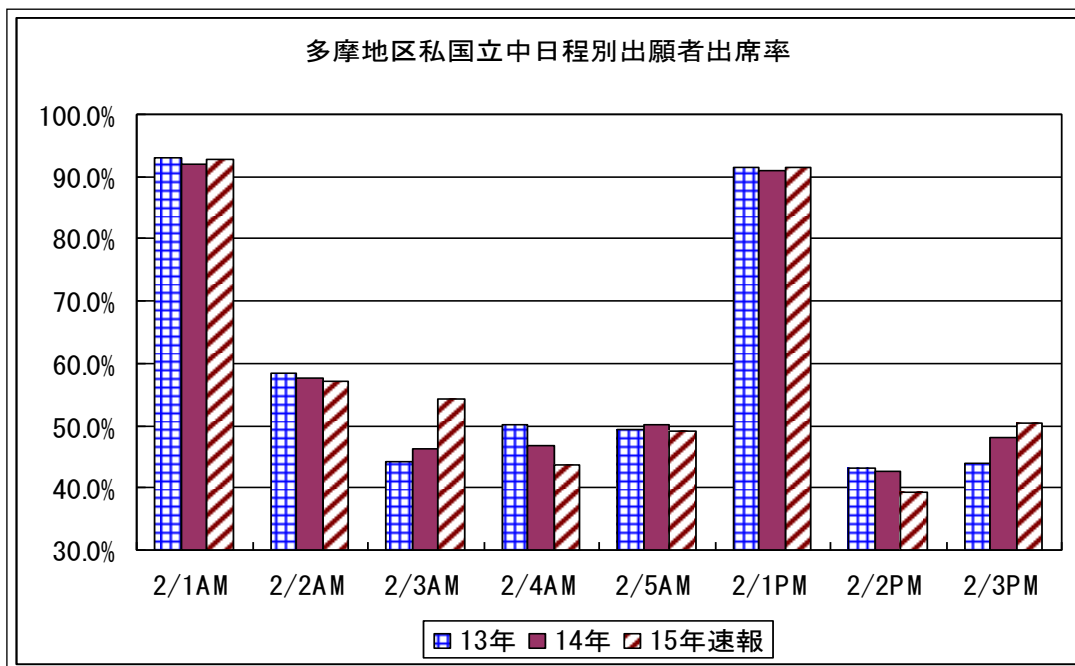
D…共立女子第二・東京純心女子・桐朋女子・武蔵野女子学院・工学院大附属・聖徳学園(特待)・玉川学園
・多摩大聖ヶ丘・日大第三・八王子学園

E…サレジオ(小平)・明法・桜華女学院・駒沢学園女子・白梅学園清修・国立音大・啓明学園・自由学園男子部
・同女子部・聖徳学園・帝京八王子・東海大菅生・東星学園・八王子実践・藤村女子・文華女子・武蔵野東
・明星学園・明星・和光

難関校のAグループは早稲田実業しかありません。グラフはそのまま早稲田実業の増減です。今年は男女とも応募者が若干増えていますが、女子は昨年並みと言ってよい応募者でした。B～Eグループでは、男子はB、C、D、Eと入り易いグループになるほど応募者数の規模が小さくなっていますが、上位校のBグループは応募者が増えているものの、中堅校のCグループは昨年、今年と応募者が減少、今年はDグループに近い応募者数に減っています。このグループが男子受験生の多摩地区中学離れの中心です。Dグループは昨年やや増えましたが、隔年現象的な変化で今年は減っています。入り易い学校のEグループは、小幅ですが昨年、今年と応募者が増えています。「まだ学力的・学習姿勢面で十分な力はないが、中高6年間でしっかり育てるために中堅までの学校を選択する」というニーズです。難関校受験ばかりが注目されがちな中学受験ですが、こうした受験生のニーズはしっかりあって、今年の男子はEグループでも応募者が増えました。

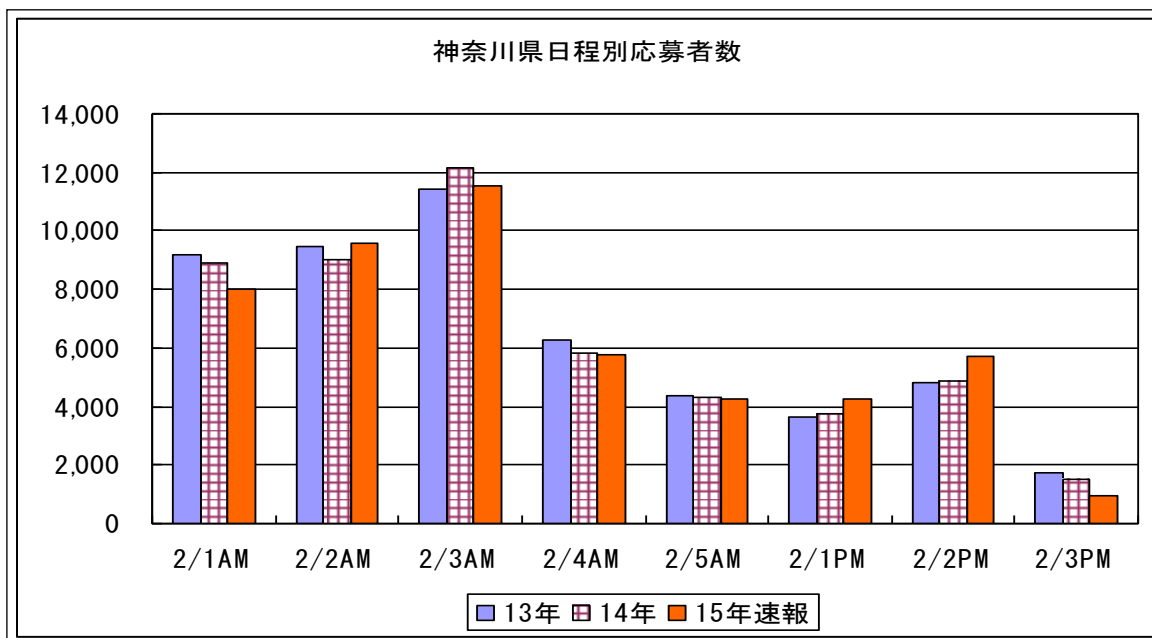
女子は昨年に続いてBグループの応募者が増えていて人気が上がっています。早稲田実業は考えないが有名大学の附属に、あるいは定評ある進学校に、というニーズです。ただ、挑戦志向でこうした学校を受験する、という受験生だけでなく、もう少し頑張ればAグループも狙えそう、といった受験生が、堅実な受験でBグループ校を選ぶケースも増えています。C・Dグループは男子のCグループ同様、昨年、今年と応募者が減っています。やはり多摩地区の中学離れの中心です。EグループはDグループより応募者がかなり少ないのですが、昨年よりやや増えています。男子同様、中高6年間でしっかり育て

ようとする学校へのニーズが増えています。



出席率も見てみます。上のグラフです。やはり出席率が極めて高い公立一貫校は外しました。全体的には23区よりも2月1日に集中して受験し、あとは欠席が多い傾向です。その傾向がさらに強まったようで、2月1日午前・午後が昨年よりやや上昇しています。他の日程では3日午前・午後が上がっています。午前は晃華と工学院大附属、午後は帝京大学の受験者の増加が理由です。

3. 神奈川県

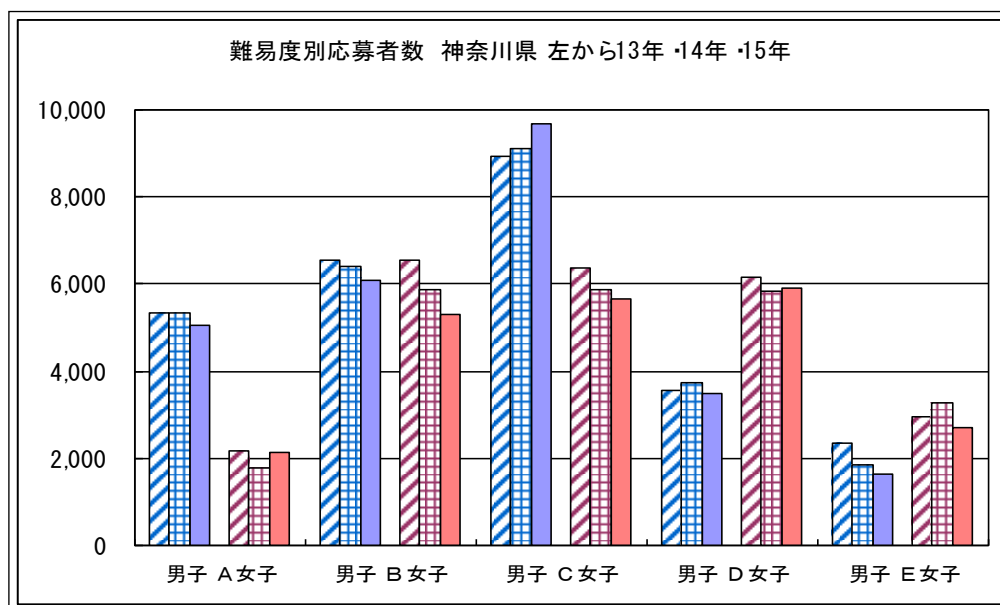


神奈川県内の公立小6生徒数は約78,000名で、昨年より約1,200名の減少です。2月18日現在の県内の中学入試の応募総数は、国立・私立・公立一貫校の合計で約51,800件となっていて、昨年の最終よりも4%近い減少です。まだ入試結果未公表の学校や、二次募集実施校があり、今後応募者数は上乘せられていきますが、いずれも小規模ですので、最終的にも昨年の水準には届かないと思われます。

前ページのグラフは今年の県内中学入試の応募者数を日程別に合計して一昨年、昨年と比較したものです。県内で実施される地方寮制校(長崎日大・宮崎日大)の入試結果は含んでいません。全体的な傾向では2月3日午前が最多ですが、これは公立一貫校と国立校がすべて2月3日に集中しているからで、私立だけなら例年2月2日午前が最多の応募者数になります。今年はその私立最多の2月2日の応募者が増えていますが、これはサンデーショックの影響です。前述のように細かい説明は割愛しますが、横浜女子御三家のフェリス女学院、横浜共立学園、横浜雙葉の3校が日曜日を避けて2月1日から2日に移動し、応募者数を増やしたことが大きな理由です。ただ、2月1日午前はその3校が抜けた分よりも応募者の減少が大きくなっています。通常は横浜女子御三家各校と湘南白百合や鎌倉女学院を併願するのが定番で、この両校は例年なら2月2日午前に実施していた入試を1日午前に動かしています。併願の関係を変えないように、との配慮ですが、この定番が崩れてきているようで、併願先に都内校を選んだり、1日午前は受験しないで午後入試校のみとする受験生が増えているようです。

こうした動きはすでに男子に出ていて、以前は、2月1日午前に都内の男子御三家各校や駒場東邦を受験し、2日午前は栄光学園や聖光学院を受験する、あるいは1日午前は早稲田実業、男子なら慶應普通部や早大学院も含めて受験、2日午前は慶應湘南藤沢、といった2日連続難関校挑戦の受験生が減って、1日か2日のどちらかを第一志望とし、もう一方は安全圏や、確実性を考えて午後入試校を受験するパターンが増えてきました。こうした動きが女子にも広がってきたようです。一種の安全志向ですが、学校を吟味するようになって、偏差値が高いだけで受験するような流れが縮小してきているようです。

日程別に戻ります。2月3日午前は、昨年は応募者数が増えていましたが、今年は減っています。昨年は新設開校の市立川崎に多くの受験生が集まり、今年は2年目で人気落ち着いたことなどが理由です。4日午前、5日午前は昨年並みの応募者数ですが、1日午後と2日午後は増えています。両日とも青山学院の系属化発表で横浜英和の午後入試の応募者数が激増したこと、さらに1日午後は鎌倉学園が新設した算数1科目入試、2日午後は桐蔭学園の入試新設が影響しています。3日午前が減少しているのは、市立川崎だけでなく、午後入試の増加で、入試の早期終了傾向が強くなっていることも影響しています。3日午後の減少は中央大附属横浜がこの日程の入試を廃止した影響が大きくなっています。



次に難易度による志望校選択の傾向を見てみましょう。グラフは各校の応募者数を難易度別に上からA～Eの5段階にグルーピングして合計し、一昨年、昨年と比べたものです。グルーピングは、各年の

入試直前の予想難易度をもとにしていて、毎年のそれぞれの難易度に対する受験生のニーズを表しています。公立一貫校は合格者の学力層の幅が大きいため外しています。また、男女別でグラフにしていて、男女校の応募者はそれぞれ男子・女子に含めています。男女別の内訳が未公表の学校は集計から外しました。グルーピングは次の通りです。

A…浅野・栄光学園・慶應普通部・聖光学院・フェリス女学院・横浜共立学園・横浜雙葉・慶應湘南藤沢

B…鎌倉学園・サレジオ学院・逗子開成・鎌倉女学院・湘南白百合学園・洗足学園・日本女子大附属
・神奈川大附属・公文国際・中央大附属横浜

C…法政第二・カリタス女子・清泉女学院・聖園女学院・関東学院・湘南学園・自修館・桐蔭学園(中等・理数)
・桐光学園・日本大学・日大藤沢・森村学園・横浜国大附属鎌倉・横浜国大附属横浜・山手学院

D…藤嶺学園藤沢・神奈川学園・聖セシリア女子・捜真女学校・横浜英和女学院・横浜女学院・関東学院六浦
・鶴見大附属(難関)・桐蔭学園(在来)・東海大付属相模・横須賀学院

E…武相・横浜・鎌倉女子大学・函嶺白百合学園・北鎌倉女子・相模女子大・聖ヨゼフ学園・聖和学院
・緑ヶ丘女子・横浜富士見丘・アレイ湘南・大西学園・相洋・橘学苑・鶴見大附属(進学)・横浜翠陵・横浜創英
・横浜隼人

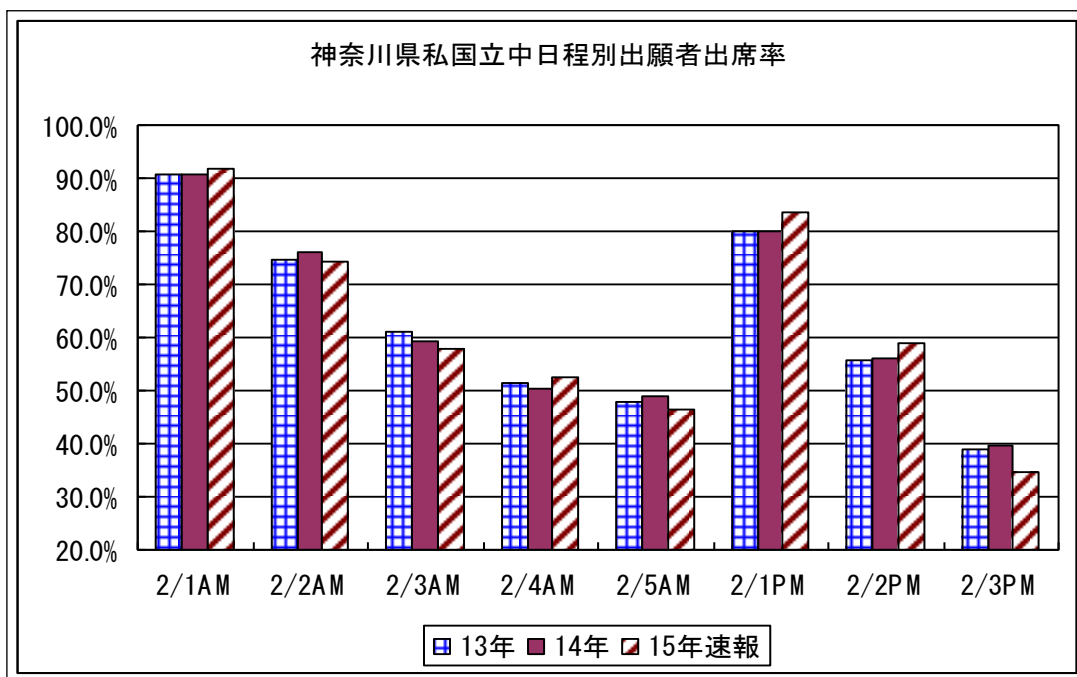
まず全体的な傾向から。男子は中堅校のCグループの応募者が一番多く、次いで上位校のBグループ、難関校のAグループの順で、やや入り易いDグループはAグループより応募者が少なく、入り易いEグループはさらに少なくなっています。女子はB～Dグループの応募者数にあまり違いはなく、Eグループになると減って、最難関のAグループはさらに少ない応募者数です。千葉県や埼玉県とは大きく異なる分布です。

昨年までとの比較では、男子はA・Bグループとも一昨年から昨年にかけてはあまり応募者数が変化していませんが、今年は少し減っています。Cグループは昨年、一昨年よりもやや増えましたが、今年はそれ以上に増えています。AグループからBグループ、BグループからCグループと、受験生が移動しているようです。安全志向が高まって、挑戦志向が弱くなっていることがわかります。ただ、Dグループは昨年よりもやや減っていて、安全志向が高くなってもCグループからDグループには受験生はあまり流れていないようです。入学するならCグループまでと考えている受験生が増えているようです。また、Eグループはもともと応募者が少ないうえに、さらに減っていて受験生のニーズにこたえきれていないことがわかります。

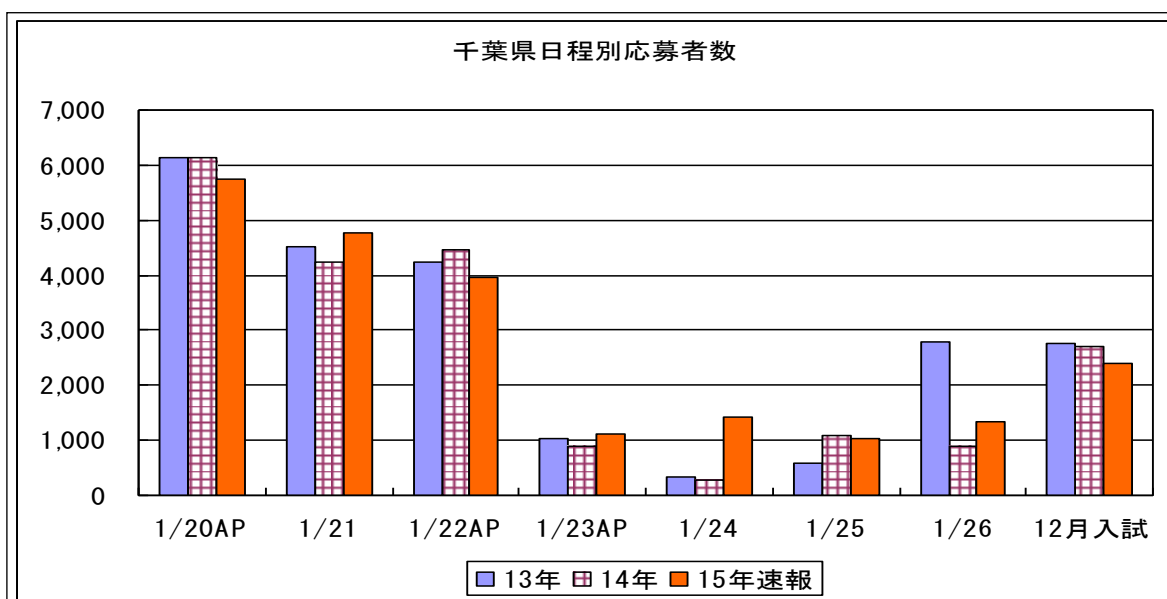
女子ではAグループが増えたものの、絶対数では少なく、サンデーショックといっても、県内女子の中学受験からすると「ごく一部の現象」だったことがわかります。B・Cグループは昨年、今年と応募者が減っていますが、公立小6生の減少よりも女子の中学受験志向が昨年、今年と弱まっている影響でしょう。Dグループも同じ理由で昨年は減少していましたが、今年は昨年並み(厳密には増加)です。これは全体的な状況はB・Cグループと同じなものの、今年は前述の横浜英和の応募者激増の影響です。将来性を期待して、本来はB・Cグループが適当な受験生も横浜英和を受験したケースが増えています。Eグループは男子よりは応募者が多いものの、今年は応募者が減っていて、進学先として考える受験生が減っています。

出席率も見てみます。次のページのグラフで、公立一貫校は外しています。日程ごとの全体的な傾向は23区と同じです。2月1日午前がやや上昇、4日午前もやや上昇、午後入試は1日午後と2日午後が上がっています。1日午前、洗足学園の受験生増加が一番の理由で、サンデーショックの影響です。

共学校では公文国際と中央大附属横浜の増加が目立っています。4日午前には横浜共立の増加が一番の理由で、こちらもサンデーショックの影響です。1日午後にはカリタス、関東学院、横浜英和の増加が主な理由です。サンデーショックの影響には違いありませんが、横浜英和の場合は青山学院系属化の影響の方が大きいと考えられます。男子校は目立たないのですが、唯一この日程だけは鎌倉学園の新設の午後入試が出席率の上昇に寄与しました。2日午後には横浜英和や横浜女学院の増加も影響していますが、一番は桐蔭学園の新設の午後入試です。ただ、それでも60%は切っていますから欠席が多いことは確かです。



4. 千葉県



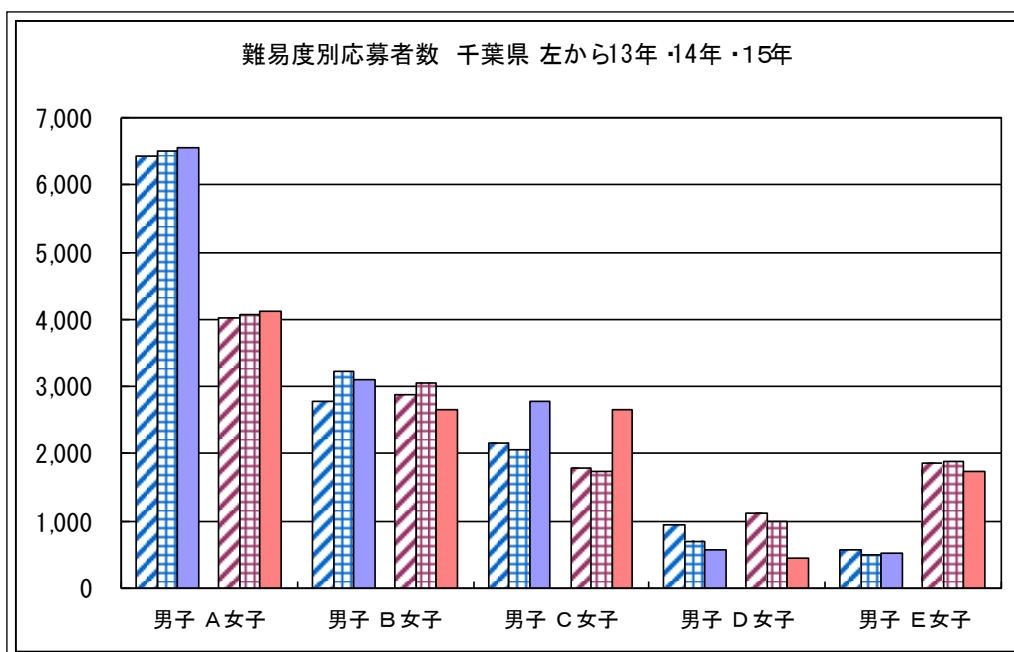
千葉県の私立中学入試は12月1日開始の推薦(第一志望・専願)入試と、1月20日開始の一般入試の2本立てです。常磐線・つくばエクスプレス線方面では一般入試しか行っていない学校が多く、総武線・京葉線・京成線方面では難関・上位校を除いて推薦入試・一般入試とも実施している学校が多くなって

います。今年の県内公立小6年生は約55,300名あまりで、昨年より約200名の減少です。県内中学入試(本稿執筆時点で千葉大附属の入試結果は未公表なので私立と公立一貫校)の応募総数は、2月18日現在で約26,600件となっています。昨年は約27,200件でしたので、千葉大附属をはじめとする未公表校が公表すれば、昨年の最終を少し上回りそうです。

前ページの下グラフは、各校の入試の応募者数を日程別に合計して一昨年、昨年と比較したものです。12月の入試は、県立千葉の1次と私立の推薦・第一志望入試、12月実施の帰国生入試の合計です。昨年との対比では1月21日、23日午前・午後(比較している過年度に23日午後入試があったためこのような表記にしていますが、今年は午前入試のみです。22日も同様です)、24日、26日が昨年より増加しており、特に24日は大きく増えています。これは、市立稲毛が今年は24日だったからで、一昨年から昨年にかけて26日が大きく減っているのは、同校が26日から25日に日程を移したことが大きな要因です。今年の25日は昨年より若干減っていますが、市立稲毛が24日に移ってもあまり減っていませんから、その分私立の応募者が増えていることとなります。この25日や、21日の増加は、麗澤の応募者が爆発的に増えた影響です。

千葉県の1月20日～22日ごろまでの入試は、東京や神奈川などの受験生が2月1日からの本番に備えて受験するお試しの場として活用されてきました。しかし、お試し受験生が1月10日から始まる埼玉県の私立中学入試に向かうようになり、応募者が減少するようになってきましたが、昨年あたりからこうした流れに歯止めがかかってきて、再び千葉県の私立中の応募者が増えています。今年もその傾向が続いている応募状況と言えるでしょう。

今年の県内受験生の動きとして注目されることは、12月入試の応募者数が減ったことです。前述のように1次を実施する県立千葉の応募者が含まれていて、こちらも減っていますが、私立の推薦入試の応募者数が減っていて、中には募集定員を下回る応募者の学校もありました。以前に比べて1月20日からの一般入試が入り易くなっていることから、無理に推薦入試でなくても一般入試を受験すればよい、その分他校と併願できて上位校の合格のチャンスがある、と考える受験生が増えているのかもしれませんが。



次に難易度別の志望校選択の状況を見てみます。グラフは各校の応募者数を難易度別に上からA～E

の5段階にグルーピングして一昨年、昨年と比べたものです。グルーピングは各年の入試直前の予想難易度をもとにしています。合格者の分布が幅広い公立一貫校は外しました。男女別のグラフで、男女校の応募者はそれぞれ男子・女子に含めましたが、男女別内訳が未公表の学校は外しています。グルーピングは次の通りです。

A…市川・渋谷教育学園幕張・昭和学院秀英・東邦大東邦

B…国府台女子・芝浦工大柏・専修大松戸

C…聖徳大附属女子(S選抜)・千葉日大第一・成田高校付属・日出学園・八千代松陰・麗澤・千葉大附属

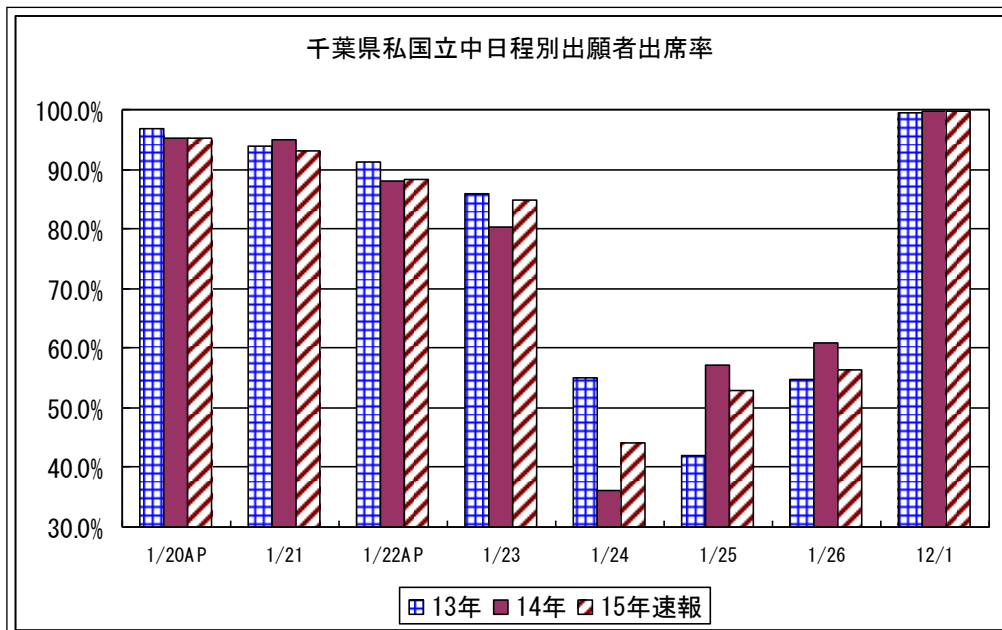
D…暁星国際・聖徳大附属女子(選抜)・東海大浦安・二松学舎大附柏

E…志学館・秀明八千代・昭和学院・聖徳大附属女子(進学)・和洋国府台・西武台千葉・千葉国際・千葉明德
・東京学館浦安

東京23区や多摩地区、神奈川県とは異なり、男女とも難関校のAグループが最多で、男子はB、C、D…と入り易くなるほど応募者が減少、女子はDグループが最少で、EグループはCグループ並みの応募者数です。男子は応募総数の半分近くがA、女子も約3割がAグループで、県内の中学受験生の半分や3割がAグループ校に応募するわけではありませんから、東京や神奈川の受験生が多く集まっているわけです。今年も男女ともAグループ校は若干増えていて、難関校の人気に変化はありません。

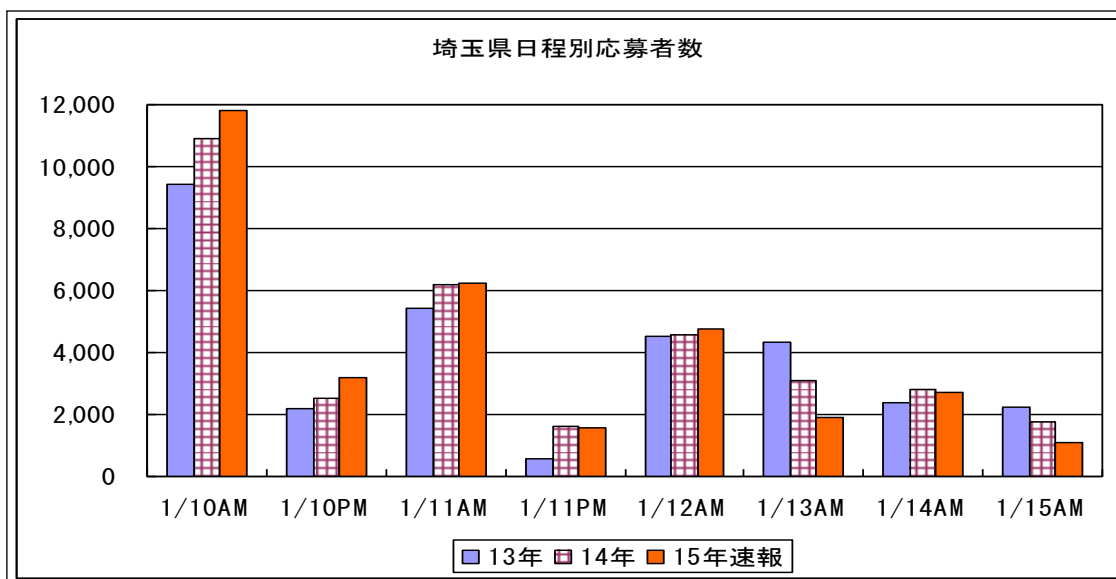
上位校のBグループは男女とも応募者がやや減少、中堅校のCグループは大きく増加しました。Cグループの増加は麗澤の応募者が急増したからです。Bグループは、去年は増えていましたから隔年現象的な面はありますが、国府台女子、芝浦工大柏、専修大松戸の3校で、芝浦工大柏と専修大松戸は地域的に麗澤と同じ常磐線沿線ですから、この両校にやや届かないかもしれない受験生が麗澤に流れた面もあり、隔年現象だけではない受験生の動きでした。

男子のD、Eグループは、今年も応募者が少なく、特にDグループは減っていて、男子ではこのグループの学校ならば中学を受験しない、という考えの受験生が多くなっています。その点女子はEグループの学校にもそれなりの人気があります。「まだ学力的・学習姿勢面で十分な力はないが、中高6年間でしっかり育てるために中堅までの学校を選択する」というニーズです。しかし、Dグループはただでさえ少ない応募者が半減、Eグループも少し減りました。女子もこのグループの学校にあまり関心を示さなくなってきたようです。



出席率をみます。上のグラフは各日程の出席率(受験率)です。他の地域と同様、公立一貫校は外しています。今まで見てきた東京 23 区、多摩地区、神奈川県とは形が大きく異なっています。12 月 1 日は推薦・第一志望入試ですから 100%近いのは当然ですが、1 月 20 日・21 日は 90%を超えていて、22・23 日も東京や神奈川の 2 日目以降よりも高水準です。昨年との比較では 21 日がやや下がっていますが、20 日・22 日は昨年並みで安定しています。23 日は上がっていますが、昭和学院の受験生増加が理由です。24 日以降は出席率が大きく下がります。早い日程で合格した受験生が欠席するためです。24 日は出席率が上がっていますが、和洋国府台の増加が主な理由です。25 日以降は出席率が下がっています。なお、前述のように過年度比較のために 1 月 22 日は午前・午後としていますが、実際には午後に入試を行った学校はありません。

5. 埼玉県

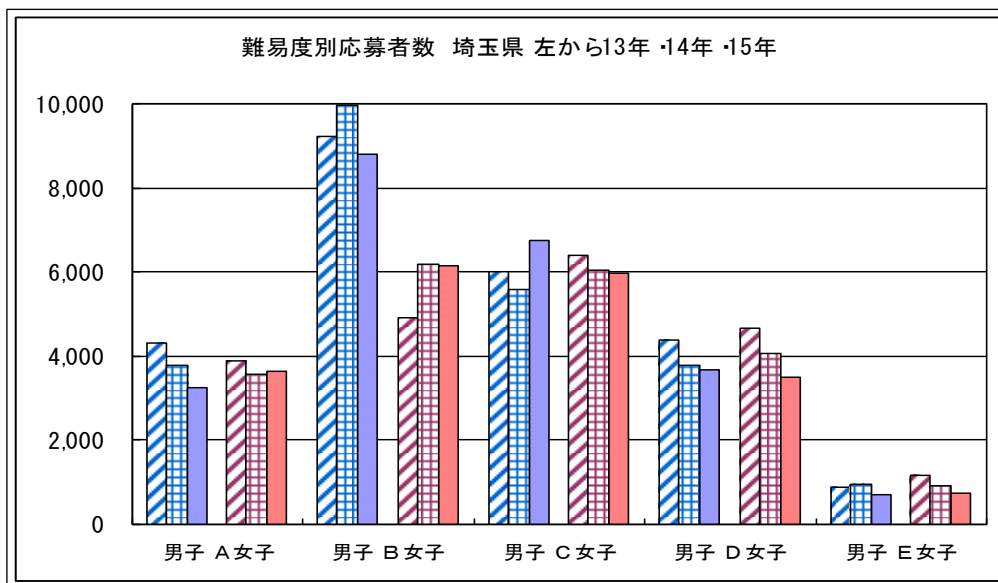


埼玉県内の公立小 6 生徒数は約 64,700 名で、昨年より 1,100 名ほど減少しています。一昨年は国際

学院、狭山ヶ丘高付属、東京成徳大深谷、武南の4校の私立中学が一斉に開校しましたが、昨年、今年と新設開校はありません。県内の公立中高一貫校を含む中学入試(本稿執筆時点で埼玉大附属の入試結果は未公表なので、私立と公立)の応募総数は、2月18日現在の速報値で約44,500件となっていて、昨年の最終に対して5%近い減少です。入試結果未公表の学校や3月になってから実施される入試などもあるため、応募総数はもう少し増える見込みですが、昨年並みの応募総数には届かず、やや減るとみられます。

埼玉県の中学期入試の応募者数は、他都県が減る中でも増えていました。これはほぼ毎年のように新設開校があつて中学受験の裾野が広がっていたこと、もう1つは千葉県の概況で触れたように、東京や神奈川の受験生の1月入試(お試し受験)が千葉県から埼玉県に移ってきたことでしたが、新設開校も一段落し、千葉県から埼玉県への受験生の流れも歯止めがかかってきて、地元埼玉県の公立小6生徒数が減少している、となれば応募者数が減るのも致し方ないのかもしれませんが。

前ページのグラフは、県内中学入試の日程別の応募者数の合計を、一昨年、昨年と比較したものです。公立一貫校も含んでいます。一部に入試結果未公表の学校や入試があります。グラフのように1月10日の午前入試が最大で、2番目の11日午前入試の2倍近い応募者数があり、一番の天王山です。昨年、今年と応募者が増えていますが、特に今年は市立浦和高校附属が昨年の11日から10日に移ったことも増加の原因の1つです。10日午後も昨年、今年と増加していますが、これは埼玉県でも私立中の午後入試が広がってきたためです。11日午前・午後、12日午前にはほぼ昨年並みの応募者数ですが、11日午前には市立浦和高校附属が10日に移り、代わって伊奈学園が12日から動いています。12日の応募者数が昨年並み(厳密には増加)なのは、伊奈学園が抜けた分、私立の応募者が増えたためです。ただ、県内の中学受験は、12日くらいまでが中心で、それ以降は小規模になります。13日午前が一昨年から昨年にかけて減っているのは伊奈学園が12日に移ったからですが、昨年から今年にかけての減少は私立の応募者が減ったからです。以前は1月17日ごろまでは応募者が少なくなかったのですが、最近は平均倍率が下がって不合格者が減ってきました。このため、遅い日程まで出願する必要が薄れてきています。



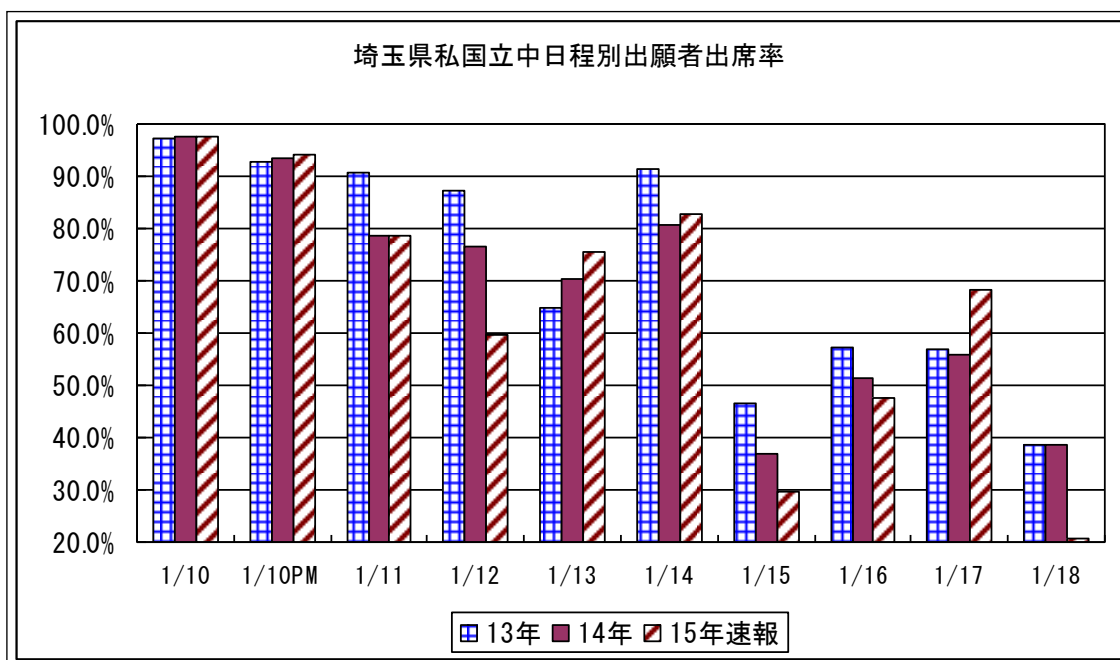
次に、難易度による志望校選択の傾向を見てみます。グラフは、各校の応募者数を学校の難易度別にA～Eの5段階にグルーピングして一昨年、昨年と比べたものです。合格者の学力層の幅が広い公立一貫校は外しています。グルーピングは各年の入試直前の予想難易度をもとにしました。男女別でグラフ

にしていて、男女校の応募者はそれぞれ男子・女子に含めていて、男女別の内訳が未公表の学校は外しました。グルーピングの内訳は次の通りです。

- A…浦和明の星・開智(先端)・栄東(東大)
- B…開智(一般)・栄東(一般)・淑徳与野・城北埼玉(特待)・西武文理(特選)・星野学園(理数)・立教新座
- C…大妻嵐山(スーパーアドバンス)・城北埼玉(一般)・大宮開成・開智未来・春日部共栄・埼玉栄(難関)・昌平(T)
・西武文理(一般)・獨協埼玉・星野学園(進学)・埼玉大附属
- D…城西川越・浦和実業・大妻嵐山(一般)・埼玉栄(進学)・埼玉平成(S選抜)・狭山ヶ丘高付属・昌平(一般)
・西武台新座(特選)・聖望学園(特待)・東京農大第三・本庄東高附属・武南
- E…浦和ルーテル・大妻嵐山(セレクト)・国際学院・埼玉平成(進学)・自由の森・秀明・西武台新座(特進)
・聖望学園(一般)・東京成徳大深谷

まず男子は上位校のBグループが絶対多数を占めていて、男子の応募総数の4割近くがBグループです。昨年は応募者が増えていましたが、今年は減少しています。難関校のAグループも応募者が減っていますから、今年は難関・上位校志向が弱まっていたようです。中堅校のCグループは増加していますから、安全志向が高くなっています。やや入り易い学校のDグループは若干ですが応募者が減っています。Eグループは他のグループよりも極端に応募者が少ないのですが、さらに応募者が減っています。安全志向が高くなってもCグループまで、Dグループ校でも出願を躊躇する受験生が多いことがわかります。

女子は難関校のAグループ、上位校のBグループ、中堅校のCグループとも、ほぼ昨年並みの応募者数で、人気が安定しています。昨年はBグループがかなり増えていて人気が上がっていましたが、落ち着いたようです。一方、やや入り易いDグループは、昨年、今年と減少が続いています。女子もDグループ校なら出願を躊躇するケースが増えているのでしょうか。Eグループは男子同様、極端に応募者が少なく、今年も応募者が減っています。女子は、Eグループ校にもそれなりの応募者がある東京23区や千葉県とは受験生の動きが違います。これが埼玉県の特徴の1つです。



上のグラフは各日程の出席率です。他都県と同様、出席率が極めて高い公立一貫校は外しています。

1月10日午前・午後は90%を超える水準で、午後はやや上がっていますが、これは城北埼玉と西武文理の午後入試新設や、春日部共栄と埼玉栄の受験生の増加が主な理由です。11・12・14日は、一昨年までは高水準でしたが、昨年、今年と水準が下がっています。1月10日の合格者が増えたため、遅い日程まで受験生が挑戦しなくなっています。今年は13日と14日が昨年より上がっていますが、13日は聖望学園の適性検査型の新設、14日は埼玉栄の受験生増加が主な理由です。15日以降は、17日を除いて出席率が下がっていて、特に18日はグラフがほとんど見えない状態ですが、早い日程の合格者が増えて遅い日程まで挑戦を続ける受験生が減っていることが理由です。17日は増加していますが、栄東の受験生がやや増えたことが主な理由です。城西川越や国際学院が入試を新設していますが、受験者数は多くはありません。